

さまざまなベトナム戦争——反共・反政府運動から 見えてくるもの

佐原 彩子

はじめに

ベトナム戦争¹⁾ 終結前後から、アメリカのベトナム撤退に伴い、13万人といわれる人々がベトナムから流出した。その後のインドシナ情勢の混乱の中で、ベトナム・ラオス・カンボジアなどから流出した人々は、「インドシナ難民」と総称され、総計300万にも上る人々が、主に欧米諸国で新たな生活を切り開かざるをえなくなった。²⁾ ただし、実質ベトナムからの流出者が大半を占めるこの「インドシナ難民」の過半は現在アメリカ合衆国（以下アメリカと略記）に集住し、しかも、統一後のベトナム政府と対立する言説世界を形成している。自らをディアスポラと呼ぶ彼らの自己理解そのものが、現ベトナム政府へのそうした対立姿勢の産物と言えるのかもしれない。あるいはそうした現ベトナム政府への対立姿勢は在米ベトナム人に限った話ではないかもしれない。例えば、ベトナム系アメリカ人キム・リバーマン（Kim Lieberman）は次のように語る。「1975年ホー・チ・ミンの共産軍へのサイゴン陥落は、新政権下での生活に不満を抱いた、あるいは、恐怖を抱いた、200万人以上のベトナム人の脱出を引き起こした。彼らは、地球上に散らばり、オーストラリア、フランス、合衆国、その他多くの国に再定住した。」³⁾ リバーマンがここで指摘するように、世界各国に散らばった人々が、それぞれの自己理解に見合った複数の記憶の共同体を世界各地で作りだしてきていることは、最近の研究で次第に明らかになってきた。⁴⁾ ただし、アメリカに集住した人々はサイゴン解放（Liberation of Saigon）をサイゴン陥落（Fall of Saigon）と呼ぶ傾向が強い。例えば、ベトナムには二つの国家記念日がある。一つは、ホー・チ・ミン（Ho Chi Minh）がハノイのバディン広場で独立を宣言した1945年9月2日を記念する独立記念日であり、もう一つは、ベトナムにとって民族の

* ベトナム語の表記はアルファベットのみで行った。また、ベトナム人の人名については基本的には姓・名の順である。ただし、英語に倣った人名表記（名・姓）が広く認識されている場合には、それに従った。

* ベトナム語の訳は筆者によるものである。

* 注におけるURLは、特に表記のないものは、2004年9月1日現在のものである。

¹⁾ 本論文で、ベトナム戦争と呼ぶのは、第二次インドシナ戦争（1960-1975）のことである。

²⁾ 『世界難民白書：人道行動の50年史』（UNHCR, 2000）, 79.

³⁾ Kim-An Lieberman, "Virtually Vietnamese: Nationalism on the Internet," in *Asian America.Net: Ethnicity, Nationalism, and Cyberspace*, ed. by Rachael C. Lee, and Sau-ling Cynthia Wong (New York: Routledge, 2003), 71-97.

⁴⁾ Hue-Tam Ho Tai, *The Country of Memory: Remaking the Past in Late Socialist Vietnam* (Berkeley: University of California Press, 2001), 228-229.

悲願であった南北統一が成し遂げられた1975年の4月30日を記念する統一記念日である。祖国に踏みとどまったベトナム人がそれらの記念日を大規模に祝うのに対し、アメリカに住むベトナム難民のほとんどはそのどちらをも無視するという。⁵⁾ その代わりに、彼らは4月30日を「国恨の日」⁶⁾ (Ngay Quoc Han / National Day of Shame⁷⁾) と呼び、統一よりは断絶を、喜びよりは悲しみを表す記念の行事を行う。⁸⁾ こうした事実は、アメリカに亡命し現ベトナム政府に不満をくすぶり続ける難民が、本国が語る正史とは別の歴史的時空間に自らの生きる世界を構築しようと試みている可能性を示す。

民族の悲願と言われた南北統一が成し遂げられた後に、なぜ在米ベトナム難民の多くはそのような本国が語る歴史とは別の歴史を立ち上げてきたのだろうか。それは、ベトナム戦争が、アメリカ対ベトナムでなく北ベトナム対南ベトナムの戦争であったことを示すのであろうか。あるいは、「民族独立」によって新たな支配関係、すなわち北の南への支配体制が確立したことを示すのであろうか。言い換えれば、悲願と言われたはずの南北統一がもたらしたものは、共産主義の南の支配であり、その体制に順応しない人々は、国外に流出するしかなかったという事実を示すのであろうか。

以上のような諸問題を検討するために、この論文では、本国とは異なる歴史の下に自らを語る在米ベトナム人、ベトナム系アメリカ人に焦点を当て、⁹⁾ その語りの示唆するものを考察する。在米ベトナム人、また、ベトナム系アメリカ人がなぜ現在のベトナム政府と対立した言説世界を構築してきたのかは、従来あまり研究されてこなかった。それよりは、アメリカにおける移民研究の伝統に沿って、ベトナム難民とその子孫がアメリカ人化する過程を具体的に分析する研究が多くなされてきた。¹⁰⁾ アメリカに入国するまでにベトナムからの難民が個々に異なる戦争体験を経てきたことは、オーラル・ヒストリーなどですでにかなり明らかになった。¹¹⁾ しかし、それらの異なる戦争体験がアメリカ入国後の彼らの生き方にどのように接木されていったのかは、まだあまり明らかになっていない。換言すれば、それぞれ異なる理由で祖国を脱出せざるを得なかった難民一人一人が、その後どのような思いを抱えながらアメリカでの生活を立ち上げているのか、彼らの心情にまで踏み

⁵⁾ Tai, *The Country of Memory*, 228.

⁶⁾ ベトナム語の han とは、韓国・朝鮮語の han (恨) と近い意味である。漢語の語源は同じ。『広辞苑』によると、ハン (han・恨) とは、「韓国民衆の被抑圧の歴史が培った苦難・孤立・絶望の集合的感情。同時に、課せられた不当な仕打ち、不正義への奥深い正当な怒りの感情」である。

⁷⁾ Tai, *The Country of Memory*, 228. によるもの。別の表現では“The Day of Anguish”など。Sonni Efron, “The Day of Anguish,” *Los Angeles Times*, A Special Report, May 1, 1990, Times Orange County.

⁸⁾ Tai, *The Country of Memory*, 228.

⁹⁾ 本来であれば、ベトナム系アメリカ人とは、アメリカ市民権を獲得している人を指す。が、難民あるいは移民として入国した人々に永住権は付与されている。それゆえ、本論文では、在米ベトナム人、アメリカのベトナム人、ベトナム系アメリカ人を特筆しない限りは、永住権を持ちアメリカに居住しているベトナム人を示す同義語として使用する。

¹⁰⁾ James Rutledge, *The Vietnamese Experience in America* (Bloomington: Indiana University Press, 1992) Nazli Kibria, *Family Tightrope: The Changing Lives of Vietnamese Americans* (Princeton: Princeton University Press, 1993)

¹¹⁾ 代表的なものに、James Freeman, *Hearts of Sorrow: Vietnamese American Lives* (Stanford: Stanford Univ. Press, 1989) など。

込んだ研究はなかなか行われなかったのである。その結果、例えばベトナム難民の「反共主義」といった問題が話題にされても、その「反共主義」の内実に様々な意味の軽重あるいは濃淡が存在することも見過ごされてきた。それでは人々の記憶を含めたベトナム戦争の全体像に迫るには不十分である。この論文では、そうした難民の心情も斟酌したベトナム戦争の全体像に迫ることを最終的な目標に、以下、論考を進めることとしたい。

1. コミュニティの形成と「われわれ」の創出

本国とは異なる歴史の下に自らを語る在米ベトナム人、ベトナム系アメリカ人とはどのような存在なのだろうか。それを説明するために、アメリカへの流入の時期や動機に着目して、一つのエスニックグループとしてみた場合の彼らの特徴をまとめてみたい。

まず、入国時期について見てみよう。アメリカにおけるベトナム人居住者は、1952年から59年までの間、200人強を数えるにすぎなかった。しかし、1960年に入ると次第にその数が増え始め、1960年から69年の間に総数3,000人以上に増加、1970年から74年の間には、約1万5,000人に膨れ上がった。¹²⁾ 現在アメリカには、122万3,736人もベトナム人居住者がいると推計される。¹³⁾ 2002年までにアメリカに難民資格で入国したベトナム人の総数が75万9,782人、2001年までに移民資格で入国したベトナム人の総数が41万2,449人であることを考慮するならば、¹⁴⁾ ベトナム系アメリカ人の居住者数122万人強のほとんどをその二者が占めると考えてよいだろう。すなわち、在米ベトナム人とは、アメリカへ難民あるいは移民という資格で流入した者であるといえるのである。また彼らは、その在米居住者数の変遷から、アメリカ社会において急増したエスニックグループの一つであるともいえる。

さらにそのエスニックグループの内部の多様性も特筆に値する。在米ベトナム人のベトナムからの出国時期やその動機などはさまざまであるからだ。次の表Aにあるように、ベトナムからアメリカへの難民・移民の流入は1975年以後も続いた。出国の時期だけで分類するとしても、まず、第一波と呼ばれるベトナム戦争終結直後に一時入国許可者という資格を与えられ、アメリカへの入国を許された人々（表Aでは、難民に含まれる）がいる。また、第二波と呼ばれる、「ボートピープル」を主とする、ベトナムからの華僑・華人とベトナム人がいる。¹⁵⁾ 彼らは、近隣諸国に滞留し（難民キャンプを経て）、インド

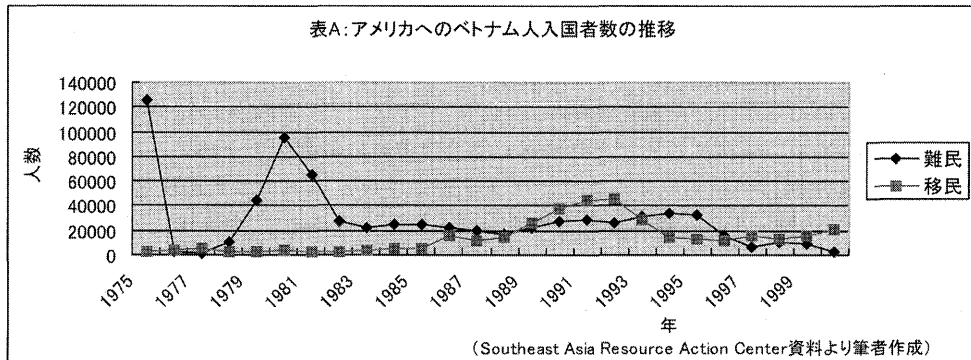
¹²⁾ Ruben G. Rumbaut, "Vietnamese, Laotian, and Cambodian Americans," in *Asian Americans: Contemporary Trends and Issues*, ed. by Pyong Gap Min (Thousand Oaks: Sage Publication, 1995), 240-241.

¹³⁾ U.S. Census Bureau, Census 2000. この数字は、アジア人のグループに属すると答えた人々のうち、何らかの形でベトナム人のグループに属すると答えた人々の数を示す。

¹⁴⁾ アメリカのベトナムからの撤退に伴って、約13万人のベトナム人の難民としての受け入れが「インドシナ難民プログラム」という名称の下行われた。これは、「東アジア難民プログラム」という合法出国計画などのベトナムからの出国者を含めた総合プログラムとして拡大していく。アメリカに入国する際に、ベトナム人がどのようなプログラムで入国するかによって一時入国者・難民・移民かビザの種類が異なる。Southeast Asia Resource Action Center. http://www.searac.org/immigrant_stats_2000.html; http://www.searac.org/refugee_stats_2002.html

¹⁵⁾ 華僑・華人をめぐるベトナム政府の政策は、古田元夫『ベトナム人共産主義者の民族政策史——革命の中のエスニシティ』（大月書店、1991）を参照のこと。

シナ難民としてアメリカに入国を許可された人々である。そして、第三波として、1979年に国連難民高等弁務官事務所とベトナムの間で締結された合法出国計画（ODP）によって、ベトナム国内から、合法的移民資格でアメリカに入国を許可された人々がいる。この人々の入国のピークが下の表Aにあるように93年であることから、1975年、1981年をピークとする第一波、第二波に続いての第三波であると考えられる。



上述した多様な人々が在米ベトナム人エスニックコミュニティを構成していると考えられる。その在米ベトナム人のエスニックコミュニティは、第一波の流入とその二次的移動、そして第一波以後も続く新たな難民の流入により成立してきた。¹⁶⁾ 例えば、アメリカで最大のベトナム人コミュニティは、ロサンゼルスオレンジカウンティにあるが、¹⁷⁾ 1978年には、ベトナム人経営の雑貨屋と、医療所と薬局が1軒ずつしかなかった。79年にはボルサ通り沿いに約30軒のベトナム人経営の店が集まりだし、第二波の到着と共に、81年には、ベトナム人経営のビジネスが350件を数えるまでになった。88年には700件、94年には1200件、現在では4000件以上のエスニックビジネスが成立している。¹⁸⁾

1975年以後急激に増えた在米ベトナム人は、彼らが依存しうるような既存のエスニックコミュニティを持っていなかった。¹⁹⁾ その事実を踏まえると、75年以後増加するベトナムからアメリカへの難民の流入と、それに伴うエスニックコミュニティの形成が、アメリカにおけるベトナム人の記憶や意見を生み出す土壌になったと理解することができる。では、その記憶や意見とは具体的に一体どのようなものであるのだろうか。コミュニティでベトナム人の団体によって、1975年以降発行されたベトナム語の情報誌をいくつか取り上げることで、その問いに答えていきたい。

¹⁶⁾ カリフォルニア州オレンジカウンティ、同州サンノゼ、テキサス州ヒューストン、ヴァージニア州アーリントンなど。

¹⁷⁾ 135,548人のベトナム人がオレンジカウンティに居住している。U.S. Census Bureau, Census 2000.

¹⁸⁾ エスニックビジネスとは、ベトナム語・ベトナム文化を媒介とした、エスニックネットワークによって成立するビジネスのこと。レストラン、美容室などから、弁護士、不動産業など。Los Angeles Times, April 28, 2000.

¹⁹⁾ Darrel Montero, *Vietnamese Americans: Patterns of Resettlement and Socioeconomic Adaptation in the United States* (Boulder: Westview Press, 1979), 48.

アメリカへ入国したベトナム人は、祖国ベトナムに強い関心を抱いていた。²⁰⁾ 祖国の情報を手に入れることは、祖国の状況を判断することであり、自分たちの状況を判断することでもあったからである。例えば、ヴァージニア州ロアノークの『仙竜』(Tien Rong)の編集者は、「興奮してられない新年」と題した文章で、自由独立のベトナムにあって人々の生活は苦しいものであり、ベトナムからのニュースは哀しいものだとして述べている。²¹⁾ そしてそのようなベトナムへのまなざしは、ベトナムの状況を批判する文章へと続いていく。不幸な自分を取り巻く状況は、革命成功後も不幸な祖国の状況と重ね合わせて考えられるからであろう。²²⁾ また、彼らはベトナムから離れても祖国と同じ習慣を行うのであり、祖国にいない自分たちがその習慣を行うことは、迫害されてその状況を余儀なくされている受難だと理解される。またそうした理解は、ユダヤ人と似た存在であるベトナム人像を生み出すこととなった。例えばそれは次のようなものである。同州アーリントンの『文化会』(Hoi Van Hoa)のテト(旧正月)に関する文章によれば、故郷の外での2回目のテトはこの筆者にユダヤ民族を思い出させるという。²³⁾ なぜならこの筆者にとって、ベトナム人がアメリカ社会に同化することは、ユダヤ人が迫害された歴史を繰り返すことだと考えられるからである。²⁴⁾ また、異郷でテトを迎えることは、彼らにとって迫害されたため、その状況を余儀なくされている受難だと理解されていた。²⁵⁾ このように、ベトナム人とユダヤ人を重ねて語るときに、ベトナム人という語の示すものは、アメリカにおけるベトナム人のことである。つまり、在米ベトナム人は、自らをベトナム人と語りながらも、南北統一後のベトナムとは違う世界に住むベトナム人像を創りだしてきたと考えられる。

こうした祖国への関心とアメリカに住むベトナム人である「われわれ」の創出は、ベトナムから1975年以降も流出する人々を、共産主義の悪から逃れてくる人々として理解することなしには、存在しえなかった。1978年には、ベトナムからカナダへ到着したベトナム難民の話がコミュニティでの発行紙に「共産ベトナムの桎梏から脱してきた人の話」として掲載されている。²⁶⁾ 在米ベトナム人は、統一後のベトナムからの難民の流出を、ベトナム人「同胞」の北の圧政からの脱出と理解し、共産主義政権を悪と描いていく。例えば、カリフォルニア州ウェストミンスターの『ベトナム人共同体』(Cong Dong Nguoi Viet)は、「共産ベトナムの5年間の罪悪」と題した文章で次のように述べた。「共産〔主義政権〕が南部を占領してから、何百万人もの人が逮捕され、監獄の中で暗殺、監禁されたり、改

²⁰⁾ “Tin Nam-Viet Doi Song Saigon Rat Kho Khan” (南ベトナムの情報 サイゴンの生活は非常に困難), *Van Nghe Tien Phong*, No.2 (Feb.15), 1976.

²¹⁾ 「平和の後なのに、ベトナムからやってくるニュースはどうして未だに喪服の〔哀しい〕色に溢れているのか」 *Tien Rong: The Viet Newsletter*, Vol.1, No.2 (Feb.), 1977.

²²⁾ 「まだ1年だけだが、今までの自由のなかでも、個人的には、2人の知人を亡くし、脚気の友人は治す薬がない。自由独立の時間のなかで、ベトナム人の人生とは取るに足りないものであった。革命成功後はさらに小さなものであるようだ」 *Ibid.*

²³⁾ *Hoi Van Hoa*, Vol. 1, No. 2, 1977.

²⁴⁾ *Ibid.*

²⁵⁾ 国外においてテトを迎えることは、ムハンマドのヒジュラを思い出させるという。ヒジュラが迫害されて余儀なくされたことから、他国にてテトを迎えることをそれと同義にみなしている。 *Ibid.*

²⁶⁾ *Hanh Trinh* (行程), Oct. 6, 1978.

造キャンプ〔再教育キャンプ〕に流刑されてきたりした。』²⁷⁾そして、その共産主義政権によって抑圧されている同胞と祖国を解放するために、何ができるだろうかと読者に問いかけた。²⁸⁾その問いは何ができるかを問うだけではなく、在米ベトナム人も、ベトナム国内におけるベトナム人も、祖国ベトナム自体も、共産主義政権に苦しめられ支配されている被害者であるから、共に祖国を解放する必要があると訴える。つまり、彼らにとって故郷の解放を訴えることは、共産主義政権の打倒によって、故郷も「われわれ」も解放されると訴えることなのである。

そのような思いは、祖国ベトナムやベトナムから流出し続ける難民に対するまなざしからのみ生まれてくるものではなかった。それには、アメリカで避難民として暮らし続ける中での、苦難の道のりと故郷の喪失感も大きく影響している。ベトナム難民のそのような思いは、例えば1980年の次のような描写に読み取れる。「〔ベトナム人は〕外国の地に頼って生きることに5年という長さが経ち、誰もがひとつのつらく苦しい、惨めな道筋を経験しなくてはならなかった。』²⁹⁾この筆者の言うその道筋とは、アメリカ社会への適応の困難な道筋であり、仕事の解雇を経験することや勉強することの困難な道筋である。³⁰⁾この筆者から見れば、アメリカ社会において、ベトナム難民を受け入れる環境は整っておらず、難民たちは福祉に頼るのではなく、働かざるをえなかったという。³¹⁾そのような状況は、この筆者にベトナム人である自己意識を強調させる。彼は言う、「われわれ避難民は、心痛や恥辱を忘れたいと願うけれども、自らのことをベトナム人だとみなし続けている」³²⁾と。ベトナム人難民にできることは、その心痛と恥辱に向き合うことしかない。彼によれば、避難民は、故郷を失っただけでなく、アメリカ社会の中で深い心痛を抱えているのだ。³³⁾

1976年6月24日に南北ベトナムが統一され、78年末、79年にベトナムのカンボジア侵攻、中越戦争が起り、80年にベトナム難民のアメリカへの入国はピークを迎える。新たなベトナム難民の流出とそのアメリカへの流入によって、在米ベトナム人は、ベトナムの戦後の状況を「共産主義の罪悪」とより明確に理解するようになった。例えば、南ベトナム解放戦線の重鎮で、戦争後は南ベトナム臨時政府の法相であったチュオン・ニュ・タン (Truong Nhu Tang) は、1978年にボートで出国し、フランス亡命後回想録を出版し

²⁷⁾ “5 Nam Toi Ac Cua Cong San Viet Nam” (共産ベトナムの5年間の罪悪), *Cong Dong Nguoi Viet*, Vol.1, No.4, 1980. 再教育キャンプとは、旧ベトナム共和国関係者を中心とした人々の主に思想面の「再教育」を目的として、戦後ベトナムにおいて設立されたもの。

²⁸⁾ 「毎分毎秒、われわれに大声で助けを求め呼び続ける骨肉の同胞のために、故郷を解放するために」 Ibid.

²⁹⁾ “Nguoi Ti Nan Tren Dat My” (アメリカの地における避難民), *Cong Dong Nguoi Viet*, Vol. 1, No. 4, 1980.

³⁰⁾ Ibid.

³¹⁾ 「アメリカ人の多くは、新しく来た避難民が社会福祉の重荷にならないために、働きに行くべきだと望んでいる。また、避難民の言葉の障壁などまったく知らないか、あるいは知っていることが明らかであっても、避難民を助ける重荷を背負うことを認めたくないのだ」 Ibid.

³²⁾ Ibid.

³³⁾ 「故郷を失った身の上とともに、その外には何も残ってはいない手の中には、悲惨な痛みがあるだけなのだ」 Ibid.

た。³⁴⁾ 著書の中で彼は、南ベトナム解放戦線がベトナム戦争後不遇な運命にさらされたこと、ベトナム共和国政府関係者の多くが「再教育キャンプ」に送られたことを語った。³⁵⁾ そして在米ベトナム人に、戦後のベトナムが北による南の支配体制を確立したことを印象付けた。³⁶⁾ 彼のように共産主義政権に不満を持ち、ベトナムから脱出する人々が増加する状況は、在米ベトナム人コミュニティにおいて、戦後のベトナムの状況を1975年4月30日を境とした「ベトナム民族」の悲劇であるとする認識を生んでいった。そしてさらに、その悲劇に終止符を打つために、祖国解放を訴える人々までも生み出した。

われわれ民族の故郷についての問題は、故郷は共産の桎梏の下で苦しみもがいているのに、75年4月30日から今日にいたる主だった歴史的出来事が、故郷と同胞を解放するのにふさわしい貢献をしていないことだ。

故郷解放問題は小さい問題でなく、海外でわれわれの生活を再建するなかでの成功のように簡単なことでもない。われわれの手中に存在している問題でもなく、一朝一夕で解決するものでもない。固く信じる心と長い間万全に準備してきた勇敢な犠牲の結合できる時機が訪れるのを、座って待っているのではなく手にしなくてはならない。(中略) 必須のことは、われわれ他郷〔故郷の外にいる〕ベトナム人が、万全の準備ができていのかどうかということである。そして、祖国解放の日を祝いに帰りたいかということである。³⁷⁾

しかしながら、ここで述べられている祖国解放とは何を指すのであろうか。その意味は、共産主義からの祖国解放である。この時点でベトナムは独立国家であり、それをまた解放するという発想は、彼らが共産主義者たちを支配者であり敵とみなしているから可能なのである。在米ベトナム人は、1975年以後のベトナムにおいて、共産主義政府が人々を苦しめていると理解していった。彼らは、自分たちが海外にいることも共産主義政府のせいであり、その共産主義政府を打倒することによって、自分たちも祖国にいる同胞も救われると考えたのである。

興味深いことにそのような理解に基づいた言説は、紙の上にとどまっただけではなかった。ベトナム社会主義共和国に反対し、抵抗運動を組織する諸団体が活動を始めていたのである。例えば1981年には、それら諸団体によって、アメリカ国内で少なくとも六つのデモ

³⁴⁾ Truong Nhu Tang with David Chanoff, Doan Van Toai. *A Vietcong Memoir* (San Diego: Harcourt, 1985) (吉本晋一郎訳『ベトコン・メモワール』原書房、1986)

³⁵⁾ 「解放後の1年間に、約30万人が逮捕された。この数は、30日間の再教育のために呼び出された旧軍将校、国家公務員そして党指導者の実数に基づいたものでしかない。私の知る限り、こうした人たちが1ヶ月後あるいは1年後にでさえ、帰って来た者は誰もいない。」吉本晋一郎訳『ベトコン・メモワール』(原書房、1986)、282。

³⁶⁾ 例えば、在米ベトナム人 Jackie Bong-Wright は回想録のなかで Tang は北の共産主義者に幻滅し、裏切られたと感じたと述べている。ここでの裏切りとは、南の革命家が北の革命家に裏切られたことであり、北が南を支配したことを意味している。Jackie Bong-Wright, *Autumn Cloud* (Sterling: Capital Books, 2001), 53.

³⁷⁾ *Cong Dong Nguoi Viet*, Vol. 1, No. 16, 1981.

行進が行われた。³⁸⁾ カリフォルニアでの二つのデモ行進はカーキ色のユニフォームに身を包んだ数百人の男たちを含めた3000人もの人々を集めたという。³⁹⁾ サイゴン陥落直前にベトナム共和国大統領を辞任し、ロンドンへ移住したグエン・バン・チュー (Nguyen Van Thieu) も、90年4月にサンノゼの反ベトナム政府集会で演説し、ハノイに政治的変化が見られないのであれば難民たちは武器を担いで家路につき再び支配をつかもうと訴えた。⁴⁰⁾ また、同年ジャーナリストのグエン・キム・バン (Nguyen Kim Bang) が連邦議会議事堂の近くで、ベトナムの政治的抑圧に反対して焼身自殺するなど、⁴¹⁾ 少なくともアメリカのベトナム人コミュニティにおいては反ベトナム政府活動がかなりの高まりを見せていた。

2. 反共・反ベトナム政府運動

次に実際に反共活動・反ベトナム政府運動を行ってきた政治団体をいくつか見ていくことで、その諸団体の行動論理や扇動論理を明らかにしていきたいと思う。そうすることで、それらの団体が1975年以後のベトナムの歴史をいかに語り、そして、どのような「われわれ」を立ち上げようとしてきたかがさらに明確になるからだ。

75年以後ベトナム難民のアメリカへの入国が加速した中で、もともとベトナム本国で反政府、反共産主義をスローガンに活動を行っていた人々が、ベトナムに存在していたのと同じ団体をアメリカで再建する動きが見られた。⁴²⁾ またそれらとは別に、海外に脱出した人々が独自にさまざまな団体を設立し、反共・反ベトナム政府活動を展開した。それらの団体は、現在の活動から大きく三つに分類することができる。すなわち、まず祖国の武装解放をスローガンにしている政治団体、続いてベトナムに人権・民主主義を求める政治団体、そして、旧ベトナム共和国色の強いベトナム系アメリカ人政治団体である。主張は少し異なるものの、以上に挙げた三種の団体は、75年以後相互に争うことなくアメリカで活動してきた。それ故、反共・反ベトナム政府活動を行う諸団体を説明の便宜上三つに分類しはするが、その相互関係は対立するものではないと考えていることは最初に断っておく。また、75年以後ベトナム人によるアメリカでの反共・反ベトナム政府活動を取り上げるため反共活動と反ベトナム政府活動は、ベトナム政府を敵と見なしていることから同義のものと見なす。その上で三種の団体を概観すれば以下ようになる。

まず、祖国の武装解放をスローガンにしている政治団体とは、ベトナム政府を武力によって打倒することを目的に、カンボジアで兵士の勧誘・訓練を行ったり、ベトナム国内で反ベトナム政府活動を行ったりしてきた団体である。その代表的なものは、「ベトナム解放統一国家戦線」(Mat Tran Quoc Gia Thong Nhat Giai Phong Viet Nam) であり、ベトナム共和国軍関係者たちが祖国の奪還を誓い、グアムの難民センターで設立したものである。⁴³⁾ ホアン・コ・ミン (Hoang Co Minh) がその指導者とされている。1982年3月、ベ

³⁸⁾ "U.S. Vietnamese Rally for Resistance." *New York Times*, June 3, 1982.

³⁹⁾ Ibid.

⁴⁰⁾ *Time*, Apr. 30, 1990, 21.

⁴¹⁾ "Fiery, Fatal Promise." *San Jose Mercury News*, Nov. 21, 1990.

⁴²⁾ 「ベトナム国民党」<http://www.vietquoc.com> 「大越革命党」<http://www.dai viet.org> など。

トナム戦争中はNBCのフリーランスのカメラマンであった、ホアン・スアン・エン(Hoang Xuan Yen)が、ベトナム解放統一国家戦線の秘密戦争地域からの報告をアメリカのベトナム人コミュニティで行った。その報告は、ミンの指令によって旧ベトナム共和国軍の兵士が反共産主義ゲリラ兵を養成し、メコンデルタ方面からゲリラ戦を開始するというものであった。その報告と同時に公表された、ベトナム解放統一国家戦線の「政治綱領」には、1975年5月から82年に至るまでのベトナムの国家体制に対する非難と、その状況から祖国を救い、新たな国を建国する旨が述べられていた。それは次のようなものである。

時間がたつにつれ、全人民が完全に失望した。食べるに足りるご飯、着るに足りる服、〔最低限の〕家族の生活の境遇のような、人のもっとも小さな願望でさえ、実現できなくなった。われわれ全人民は、次第に袋小路に入っていった。残っている唯一の〔そこからの〕脱出路は、ソビエト・ロシア帝国の手下でありわれわれ全人民につらく苦しい思いをさせるベトコンの暴政を打倒するために、共に立ち上がることである。⁴⁴⁾

75年5月から82年のこの「政治綱領」の公表までの間に、ベトナムの人々は失望してきたという。⁴⁵⁾ この「政治綱領」でいう「われわれ」が、75年にベトナムから出国した、そもそも共産主義に期待などしていなかった人々ではなく、75年以後の共産主義政権下で苦渋をなめさせられた人々であることに改めて注意したい。「政治綱領」が誰に向かって語りかけているのかといえば、共産主義政権下で苦しい経験をしてアメリカにやってきた人々と、ベトナムに残されているそのような経験をしているであろう家族・親戚・友人をもつ人々に対してなのである。この「政治綱領」は、そういった人々に対して、救国と建国、祖国解放と新政府の樹立を目標にして活動する「ベトナム解放統一国家戦線」への協力を呼びかけるためのものであった。

また、この「政治綱領」は、当時の冷戦レトリックを反映したのもでもあった。それは、ベトナムの影にソビエトが存在することを示唆するところに見てとれる。「政治綱領」は次のように「ベトナム解放統一国家戦線」の決起を宣言した。1975年5月から、ベトナム人民はソビエトを黒幕とする支配下におかれ、国家の財源はその黒幕への朝貢のために掠め取られているという。そして、その黒幕の指令に従って、ベトナムは中国と戦争を起こし、ラオスをベトナムから官僚を連れて行く形で占領し、カンボジアを侵略し占領したのだと述べた。そして、人々はその暴政の過酷な統治に耐えることができず、国を捨てざ

⁴³⁾ "A Long Way from Home Some Vietnamese Immigrants Have Quietly Assimilated; for Others Who Yearn to Return Home, the War Goes on." *The Los Angeles Times*, Jan. 5, 1986. 2005年2月26日現在、[ベトナム刷新革命党](Viet Nam Canh Tan Cach Mang Dang)とその名を変えている。http://nufronliv.org

⁴⁴⁾ Mat Tran Quoc Gia Thong Nhat Giai Phong Viet Nam (ベトナム解放統一国家戦線), *Cuong Linh Chinh Tri* (政治綱領), Mar. 8, 1982.

⁴⁵⁾ 「隣国と仲の良い一つの自由独立国家として、故郷の再建に能力を結集し、衣食の満ち足りた平穏で幸せな生活をつくる日々を過ごすことができると考えた(中略)が、時間が経つにつれ、全人民が完全に失望した」Ibid.

るを得なかった。⁴⁶⁾ そこで、世界各国に逃げざるを得なかった同胞たちが武装勢力を形成し、ベトコンの暴政の消滅のために決起するのだと主張した。⁴⁷⁾ ベトナム国内の状況、ソ連の後ろ盾、中国との戦争、ラオスへの制圧、カンボジアへの侵略など、ベトナムを取り巻く世界情勢のなかで、ゲリラ活動を開始して祖国を奪還するという考えは、アメリカのベトナム人コミュニティにおいて、誰もが荒唐無稽の話ととらえたのではなかった。なぜなら、1983年に入って、オレンジカウンティでそれらの活動の報告集会が2回開かれ、84年末までには1ヶ月に1万5000ドルの寄付がカリフォルニアだけで集まったからである。⁴⁸⁾

しかし、その団体の活動が疑問視される事態も起きている。⁴⁹⁾ 1991年には、サンノゼの連邦大陪審に「ベトナム解放統一国家戦線」の5人のリーダーが起訴された。起訴事実によると、その団体は、非営利団体を名乗って集めた寄付をハノイの攻撃のための兵器購入ではなく、個人的出費に使用していた。⁵⁰⁾ しかし、そういった事態にもかかわらず、「ベトナム解放統一国家戦線」のホームページのトップページには、次のようなミンの言葉が飾られていた。「抗戦へわれわれが向かう道には二つの目的がある。二つの目的とも限りない栄光と意味がある。一つ目は、祖国ベトナムの解放。二つ目は、祖国解放のための勇敢な犠牲である。」⁵¹⁾

この団体のように直接行動による政府の転覆を呼びかける反政府活動団体は他にもあるが、⁵²⁾ 現在にいたるまでどの団体もベトナム政府の転覆には成功していない。例えば、1982年5月半ばにベトナムを出国し、タイの難民キャンプへたどり着いた旧ベトナム共和国軍大佐は、反ベトナム政府の抵抗運動に参加していたが途中で参加を取りやめた。何故なら、その運動の存在が疑わしいものであったからである。⁵³⁾ 彼が体験したような、抵抗運動と称して海外のベトナム人コミュニティにおいて活動を報告し資金を集めるといった活動は、難民となった人々の祖国への思いを代弁するものとして盛んであった。にもかかわらず、実際に報告されたような活動が行われていなかった事態も数多い。そのような状況が繰り返されてきたのは、統一後のベトナム政府転覆を目指した活動が、たとえ生活

⁴⁶⁾ 「虐げられた召使として生活し続けることができず、何百万ものわれわれの同胞たちは、難を避けるため、故郷を捨てて、国を失わなければならなかった」Ibid.

⁴⁷⁾ Ibid.

⁴⁸⁾ “A Long Way from Home Some Vietnamese Immigrants Have Quietly Assimilated; for Others Who Yearn to Return Home, the War Goes on.” *The Los Angeles Times*, Jan 5, 1986.

⁴⁹⁾ 例えば前述したYenの報告のカンボジアとベトナム国境付近の戦闘区域というのはなく、彼がタイで2日間のハイキングをもとに創ったなど。

⁵⁰⁾ “Guerrilla in the Midst.” *OC Weekly*, Mar. 12-18, 1999.

⁵¹⁾ <http://nuftronliv.org> (accessed Nov. 10, 2003)

⁵²⁾ その他にも、1984年に設立された、ベトナム革命連合 (Lien Minh Cach Mang Viet Nam) などがあったが、現在の活動はわからない。「ベトナム民族再生党」「国家再生民族連合」などの連合体だといわれており、「ベトナム民族再生党」は、カンボジアで活動していたらしい。また、1995年設立の「自由ベトナム (臨時) 政府」は、いまだ活動している。

⁵³⁾ 「その抵抗運動はほぼ作り事で実在しないことを知ったためであった」(旧南ベトナム軍大佐の回想) James Freeman, *Hearts of Sorrow: Vietnamese American Lives* (Stanford: Stanford Univ. Press, 1989), 348.

資金を集める目的だけのものであったとしても、祖国奪還を願う人々の思いをさまざまなレベルで吸収できたからだと考えられる。武力闘争を目標とした祖国解放運動は、負けた戦争を再び勝てる戦争と信じて立ち上がろうとするものである。それは、祖国を奪回することを夢見ることであり、多くの人々にとってその夢は依然としてリアルなものであったのである。

第二のベトナムに人権・民主主義を求める政治団体は、ベトナム社会において普遍的な人権・民主主義などの確立を求め、ベトナムの内政を批判する立場をとっている。これらの団体が、ベトナム政府をそれら普遍的権利の民衆に対する抑圧者として攻撃するのは、ベトナム政府が共産主義政府であるからである。前述した第一の諸団体のように武力には訴えないが、ベトナム政府が共産主義であることを問題視する点では同じである。

人権・民主主義を求めるこうした政治団体の一つである「自由ベトナム連盟」(Free Vietnam Alliance)は、1990年7月14日設立された。もともとこれは、同年7月13日から15日にパリで開かれた「ベトナムの自由と民主主義の運動会議」⁵⁴⁾が発展した形で成立した団体である。その会議の目標は、ベトナム本国での政治体制の変革を求める動きに対応して、ベトナム内政の変化を平和的に求めるものであった。その代表委員会メンバーのゴ・ドゥック (Ngo Duc) は、1995年スタンフォード大学で、ベトナムの経済状況について触れ、ベトナムが未だ貧しい状況であるのはベトナムが共産主義体制であるからだと、その制度を批判している。彼は、75年からの国内外のベトナム人を統一後のベトナム政府によって苦しめられている人々と考え次のように述べている。

20年前、サイゴンが陥落した時、それは我々の失敗した政策の終わりを示した。不幸なことに、ベトナムの人々の受難はそこで終わりではなかった。それ以後、200万人のベトナム人が、可能であればどんな方法であれ脱出しなければならなくなり、世界中に分散した。60万人以上の人々が亡くなり、自由へ到達することができなかった。他の数十万人の人々は、いわゆる再教育キャンプや新経済区で、非業の死を遂げた。今日、記憶は色あせていくかもしれないが、暗闇は未だはびこっているのだ。(中略) 民主主義と自由が、ベトナムに復活したときのみ、戦争の傷跡が永久に癒されることができるだろう。自由のたいまつは、過去の暗闇を葬り去るだろう。⁵⁵⁾

彼は、難民が流出するのは共産主義から脱出するためであり、共産主義政府が難民を流出させる原因だと考えている。戦後のベトナムが、民主主義と自由が存在しない社会であるから、ベトナム国内に残る人々は苦しめられ、難民は流出するのである。だから、ベトナム社会が民主主義と自由を復活させなければならないのである。

三つの分類の最後である、旧ベトナム共和国色の強いベトナム系アメリカ人政治団体とは、ベトナム系アメリカ人を有権者とし、アメリカの政界にベトナム系の代表者を送り、ベトナム本国の政治に干渉していこうとする立場をとる団体のことを指す。統一後のベト

⁵⁴⁾ 1989年秋のベルリンの壁崩壊などにベトナム人学生運動・政治運動が呼応した形で開かれた会議。

⁵⁵⁾ 1995年4月27日のスピーチより。http://www.fva.org/0595/speech.html (accessed Oct. 30, 2003)

ナム政府に反対する活動のなかではこれが一番新しい動きである。だが、前述した二つの種類の団体と同様に、現ベトナム政府の政策転換の要求と本国ベトナムと対立するベトナム人・ベトナム系アメリカ人像を積極的に主張している。

そうした団体の一つである「ベトナム人全国協議会」(National Congress of Vietnamese in America) は、1986年にベトナム政府による政治的抑圧に反対して結成された。⁵⁶⁾ 今は「ベトナム系アメリカ人全国協議会」(National Congress of Vietnamese Americans: 以下NCVA) とその名を変えている。NCVAは、ベトナムにおける再教育キャンプからの人々の解放を求め、その解放された人々をアメリカへ受け入れることを推進する「ベトナム政治犯家族協会」⁵⁷⁾ に協力してきた。また、89年4月には、アメリカにおけるベトナム人諸団体とともに「ベトナム人政治犯のアメリカへの受け入れのための調整委員会」を設立した。⁵⁸⁾ そして、東南アジアと香港のベトナム難民キャンプが閉鎖されるまで、その難民救済の活動に積極的であった。⁵⁹⁾ それらの活動を支えたのは、NCVAメンバーのベトナムに残された人々に対する同情とベトナム政府に対する不信感であるといえる。そういった思いは、ベトナム国内の人権問題に関してのアメリカ議会の公聴会において行われた、NCVAの会長グエン・マウ・チン(Nguyen Mau Trinh)の証言のなかにも表れている。その証言は、ベトナム政府がメディア規制とジャーナリストに対する抑圧と政治弾圧を行っていることを指摘するものである。その最後に彼はこう付け加える。

25年の亡命〔生活〕のなかで、私は母の死を告げる義兄弟からの1本の電話を受け取った。その電話の1分は2日分の生活費がかかるために、私はどのようにして、なぜ、母が亡くなったのか尋ねることができなかった。⁶⁰⁾

彼は、ベトナムに残る家族が母の死を十分語ることもできない状況をベトナム政府のせいだと考えている。ベトナムからアメリカへの電話の1分の代金が、ベトナムでの2日分の生活費にあたることを述べることで経済格差を明らかにするだけでなく、その状況はベトナム政府の責任であると述べた。当然のことながら、在米ベトナム人にとって、ベトナムにおける経済的問題は政治的問題と捉えられているのである。NCVAの活動は、そういったベトナム国内の問題への取り組みだけではなく、コミュニティを基盤とした政治活動にも取り組んでいる。⁶¹⁾

⁵⁶⁾ "Vietnamese Congress in America Continues Push for Freedom." *Asian American Press*, Aug. 31, 1990.

⁵⁷⁾ Families of Vietnamese Political Prisoners Associationの設立者である Trinh Ngoc Dungはその功績がたたえられ、1994年に大統領コミュニティボランティア賞(President's Community Volunteer Awards)が送られている。<http://www.pointsoflight.odg/presidentWinnerDetails.cfm?ID=593> (accessed Oct. 30, 2003)

⁵⁸⁾ <http://ncvaonline.org/history.htm>

⁵⁹⁾ Ibid.

⁶⁰⁾ Testimony at hearings in the U.S. Congress, Congressional Human Right Caucus, March 29, 2000. http://www.ncvaonline.org/archive/pr_032900_testimony.htm#march%2029.%202000

⁶¹⁾ 現在のNCVAの活動目標は、「ベトナム系とアジア系アメリカ人の、市民的・全国的な事柄やコミュニティの取り組みへの積極的参加を促す」などである。<http://ncvaonline.org>

1996年に設立されたベトナム系アメリカ人広報委員会 (Vietnamese-American Public Affairs Committee: 以下VPAC) は、有権者教育 (Voter education) を軸として、ベトナム系アメリカ人の政治参加を拡大することを目標にしている。⁶²⁾ VPACによれば、ベトナム系アメリカ人は「政治難民」であるという。それは、ホームページ上の次のような表現に見てとれる。「かつて政治難民であったため、われわれはベトナムを含めた世界各地の人権の強い擁護者である。」⁶³⁾ また、VPACのいうベトナム系アメリカ人とは、ベトナム共和国消滅の歴史と非常に深く関わっている存在である。例えばVPACは、旧ベトナム共和国国旗を「ベトナムの自由と遺産の旗」⁶⁴⁾ と呼び、これをベトナム系アメリカ人コミュニティの象徴にしようと活動を続けている。現在のベトナム国旗は共産主義の象徴だから認めることはできないというのだ。⁶⁵⁾ その活動は2003年になって、アメリカの街や州に、旧ベトナム共和国国旗をベトナム系アメリカ人コミュニティの公式の象徴として認めるように要求する、ベトナム系アメリカ人のロビー活動へと展開した。そして、それは、ウェストミンスター、ガーデングローブ、フォールズチャーチなど、ベトナム系住民が多く住む地域の市議会で、旧ベトナム共和国国旗をベトナム系アメリカ人コミュニティの公式の旗として認める決議案が可決される形で実を結んだ。⁶⁶⁾ さらに、サンノゼの市議会は、4月30日を「暗黒の記念日」(Black April Remembrance Day) とする宣言の中で、旧ベトナム共和国国旗をベトナム系アメリカ人コミュニティの旗と認めた。⁶⁷⁾ このような活動が各地のベトナム系コミュニティに広がったのは、その各コミュニティのなかに、共産主義政権に反対する政治的立場をとる人々、現ベトナム政権に対し批判的立場をとる人々が存在するからだといえる。ガーデングローブ市市長代理であるベトナム系アメリカ人のバン・トラン (Van Tran) は、⁶⁸⁾ 旧ベトナム共和国国旗に対する市の決議に賛成し、次のように述べる。「アメリカにとって戦争は終わってしまったかも知れないが、多くのベトナム難民にとって戦争は別の局面で、政治的局面で続いているのだ。」⁶⁹⁾ このように、現ベトナム政府とベトナム系アメリカ人の対立をベトナム戦争から続く、「北ベトナム」対「南ベトナム」の対立とみる人々も存在する。

第三の分類に入るものとして紹介した上述の二つの団体のように、祖国の奪還ではなくエスニックマイノリティとしての政治参加に目的をおく政治活動が在米ベトナム人の間に

⁶²⁾ http://www.vpac-usa.org/about%20vpac/vpac_index.htm

⁶³⁾ http://www.vpac-usa.org/about%20vpac/vpac_index.htm

⁶⁴⁾ http://www.vpac-usa.org/flag/flag_index.htm

⁶⁵⁾ 何十万のベトナム人が、戦争においてではなく、ベトナムの共産主義政府の懲罰から逃げ、必死で自由を求めるなか、海において自らの命と家族を失った象徴であるから認められないという。Ibid.

⁶⁶⁾ 2003年2月12日カリフォルニア州・ウェストミンスター (Resolution No:3750) 3月11日同州・ガーデングローブ 4月14日バージニア州・フォールズチャーチ (TR03-17)、Ibid

⁶⁷⁾ 4月15日カリフォルニア州・サンノゼ、Ibid.

⁶⁸⁾ 彼は、ベトナム系アメリカ人の有権者登録を推進する、1990年代に創設された「ベトナム系アメリカ人有権者連合 (Vietnamese-American Voters Coalition)」の創立者の一人であり、ベトナム系アメリカ人を政治に参加させることで、エスニックマイノリティとして政治力を獲得することを目標としている。

⁶⁹⁾ <http://www.fva.org/vnflag/AP-activists.htm>

見られることは、ベトナム人コミュニティ内の世代交代を示していると思われる。また、そのような目的の変化は、ベトナムのドイモイ政策の開始、アメリカのベトナムに対する経済制裁解除などの面から、在米ベトナム人コミュニティが祖国奪還の夢を見ることから軌道修正を迫られた結果ともいえる。しかし、これまで述べてきたように、三つの類型による反共・反ベトナム政府活動は現ベトナム政府を武力で倒すことから政治政策の転換を求めるものまでその活動が目指すものが異なるにせよ、敵としての共産主義政府、つまり敵としての現在のベトナム政府という認識は共通している。

ここで、在米ベトナム人がアメリカで市民権を得て、アメリカ社会におけるエスニックマイノリティになっていくことは、自分たちとアメリカ社会との認識の差に直面することでもあったことにも言及しておきたい。例えば、在米ベトナム人にとって、アメリカにおけるベトナム戦争の表象は大きな問題である。なぜなら、アメリカにおいてベトナム戦争はベトナム対アメリカの戦争として描かれるからだ。アメリカ社会において、ベトナム戦争がアメリカ対ベトナムの戦いとして描かれる以上、在米ベトナム人は、自らを「南ベトナム」やベトナム難民と関連させることによって、アメリカにいることに意味を与えなくてはならない。⁷⁰⁾ そうして、また、ベトナム系アメリカ人の歴史の形成は、反共主義やベトナム共和国国旗を組み込むことなしには存在し得ないものとなる。

三つに分類し述べてきた反共・反ベトナム政府活動を行う諸団体は、さまざまなベトナム難民・移民がアメリカに流入する中で、現ベトナム政府と対立する「ベトナム人」像を主張してきた。在米ベトナム人のように多様な出自の人々が、アメリカにおいて一つのエスニックグループとして政治的に力を持つためには、現ベトナム政府に対して何らかの形で不満を持つ「ベトナム人」である「われわれ」という主体を確立する他なかったともいえる。

結 論

ベトナム戦争終結後から始まったベトナム人のアメリカへの大量の流入は、在米ベトナム人コミュニティを形成していきながら、現ベトナム政府に対立するベトナム人である「われわれ」を創出した。その「われわれ」という主体は、祖国への関心と新たに流入し続ける難民の存在によって補強され、祖国解放を目指した抵抗運動を行ってきた。前述したようにベトナムの奪還を求める解放運動は修正を迫られながらも続いている。それを支えているのは、旧ベトナム共和国の存在と戦後のベトナムの政策への批判であり、そのような批判姿勢はベトナム系アメリカ人の政治団体にも見てとることができた。本論文で取り上げた本国とは別の場所に歴史を立ち上げるために必要な「われわれ」やそれに基づく共同体は、常に現在を通し過去を再構築し続ける。そして、本国ベトナムにおける政府批

⁷⁰⁾ 代表例は、PBSのベトナム戦争のドキュメンタリー番組である。その制作と放映に、在米ベトナム人コミュニティは猛反発した。その反対する理由は以下のようなものであった。「この〔テレビ〕シリーズは、アメリカの負けた同盟者に、ベトナム人兵士に、ベトナムからの脱出のために死を恐れなかったベトナム難民に、自らのルーツを探したいと望んだときにこの種類の『教育的』資料を与えられるであろうその子供たちに、極端に不公平である。」Nguyen Manh Hung, "Vietnam: A Television History. A Case Study in Perceptual Conflict Between the American Media and the Vietnamese Expatriates." *World Affairs*, vol. 147, no. 2, 1984.

判も取り込んで、戦争の意味を問い続ける。例えば、1990年に共産党から党籍を剥奪されたベトナム人作家ズオン・トゥ・フオン (Duong Thu Huong) は、ベトナムにとどまりながら、ベトナム政府への批判を続けている。彼女は、1999年にベトナムの現状について以下のように述べていた。

われわれの国では、戦争から25年経ったのに、いまだに窓からピアノの音は聞こえず、人々は、ひどい抑圧を受ける中で、民主主義の初めてのレッスンをおそおそと学び始めたばかりだ。(中略) この土地で聞こえてくるのは、いまだ、北から南へ、南から北へ、墓場の上を飛ぶ、カラスの群れの羽ばたく音だ。⁷¹⁾

この文章は、在米ベトナム人コミュニティのホームページで取り上げられた。なぜなら、抑圧されるベトナム人の語りとして国内ベトナム人と海外ベトナム人をつなぐものとして読まれたからであろう。彼女のいう「われわれ」は、ベトナムにいるベトナム人だけではなく、ベトナムを祖国と考える海外のベトナム人も内包するからだ。また、ベトナム本国で人々が抑圧されていることと海外ベトナム人が海外にいることは同様に苦しい状況として理解されるからだ。

この論文では、ベトナム戦争が、北対南の戦争であったかどうかという事実よりも、そういう歴史認識に基づいて戦争が語られていることが明らかになった。さらに、独立後のベトナムの状況がそこから流出する人々を生み出し、その人々の流出がさらに在米ベトナム人の歴史認識を裏付けてきたことも明らかとなった。彼らの意見が反共・反ベトナム政府を標榜する立場をとるのは、彼らがアメリカにいることから、当然の帰結なのかもしれない。彼らが統一後の本国ベトナムとは違うベトナムを積極的に求めて武力での祖国奪還を主張したり、難民としてのベトナム系アメリカ人の政治的立場を現ベトナム政府に反対するものとして主張したりするのは、敵としてのベトナム政府という存在があってこそ可能であった。敵としてのベトナム政府とは、在米ベトナム人が生み出した存在であり、彼らの敵である共産主義者たちが祖国ベトナムを支配していると認識することにより存在してきた。彼らがそのような認識を持ったことは、独立後のベトナムがそれらの人々を包摂することができなかったことを示している。彼らは、ベトナム戦争が北ベトナム対南ベトナムの戦争であったと主張したり、自らを「政治難民」だと主張したりしている。そのような行動は、彼らが本国ベトナムともアメリカとも異なる歴史認識を抱える人々であることを示す。そしてそれはまた、ベトナム人にとってのベトナム戦争がベトナム対アメリカに単純化されえないことを示すのである。

⁷¹⁾ "The Flapping Noises from a Flock of Crows," July 30, 1999. <http://www.dfn.org/voices/vietnam/duongflock.htm> (accessed Jun 10, 2003)

“Vietnam Wars”: Movement Against Communism and Socialist Republic of Vietnam in Vietnamese American Communities

〈Summary〉

Ayako Sahara

From the time when the American evacuation of Vietnam began in April 1975, at the end of Vietnam War, about one hundred thirty thousand Vietnamese refugees fled their country. The flows of people did not stop there. As the situation in former Indochina worsened, more and more people left. Many of them resettled in the United States, from which they have been opposing the Government of the Socialist Republic of Vietnam (SRV). The purpose of this paper is to explain their attitudes towards the SRV, describe how those attitudes were formed, and discuss what they imply.

There were no existing indigenous ethnic communities that Vietnamese refugees could rely on after they arrived in the U.S., so once they had settled on the U.S. soil, they built several communities across the U.S. from scratch.

The existence of Vietnamese communities recreated Vietnamese identities in America, with a strong tendency towards anti-communism, because the Communists had occupied their homeland. The Vietnamese in America perceived themselves as exiles, or expatriates. Some of them claimed that they wanted to go back to their country and fight back against the regime. That sort of idea was not simply expressed in on their community papers. Rather some anti-communist and anti-SRV groups that insisted on overthrowing the Communist government in Vietnam and building a new democratic nation were formed in the 1980s. But the force of this movement has waned and different kind of groups that try to promote Vietnamese political activism in America have been formed, with the purpose of stabilizing their status as an ethnic minority in the U.S.

Vietnamese and Vietnamese Americans in the U.S. have reconstructed their ethnic identities through remembering their own history. Their political activities suggest that the Vietnam War was not simply a war between Vietnam and the U.S.